

1 推進地域としての取組

本地域は、愛媛県の最西部に位置し、宇和海と瀬戸内海に面している。日本一細長い半島として知られている佐田岬半島の先端にあるため、以前は交通困難な場所であったが、平成元年に開通して新しくなった国道197号線によって、交通の利便性が高まり、多くの人々が本地域を訪れるようになった。しかし、人口は約4,150人で、このうち高齢人口比は39%、年少人口比は11%と近年高齢化・少子化の影響を受け、県内でも過疎化の進んだ地域である。基幹産業はかんきつ業を主とする農業と漁業であるが、後継者不足も目立ち、児童生徒の自然体験や農業・漁業体験も著しく減少してきている。

このような状況を踏まえ、推進地域全体の取組としては、ふるさとを知り、ふるさとに親しみ、ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思う人間の育成を目指し、次の3点についての体験活動に取り組んでいる。

- (1) 自然、文化、歴史、伝統、産業などの地域素材を通して、三崎町を見つめる学習
- (2) 自然体験、社会体験、生活体験、ボランティア体験活動などを通して、ふるさとで生きて働く学習
- (3) 地域人材、地域施設の積極的な活用

2 本校の取組のねらいや内容

本校の位置する三崎町は、自然豊かな地域である。勤労生産体験・社会奉仕体験・自然体験など体験学習をする環境は整っているが、そのような地域のもっている教育力を生かし切れていないのが現状である。

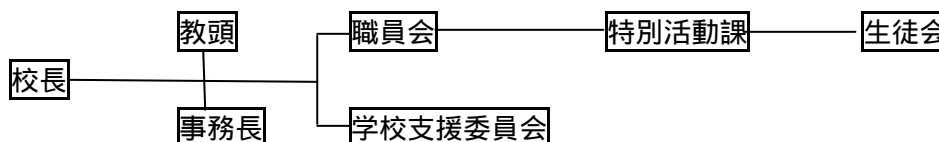
そこで、地場産業であるかんきつ栽培にかかわる勤労生産体験や生活者として地域の環境美化にかかわる社会奉仕体験などの地域貢献活動を通して、魅力ある社会を積極的に創造しようとする態度を養うことをねらいとして設定した。

取 組 の 内 容

勤労生産にかかわる体験活動	社会奉仕にかかわる体験活動
かんきつ栽培における体験活動 ・摘果、除草作業（7月） ・袋かけ作業（12月） ・収穫作業（2月、3月）	国道の環境美化 ・清掃（5月） ・緑地帯の美化（5月、7月、10月） 河川の清掃（7月）

3 学校支援委員会の組織・運営

(1) 推進体制



(2) 学校支援委員会の組織・運営

学校支援委員会は、校長・教頭・事務長・特活課長・PTA会長・PTA副会長・PTA監事といった学校関係者と地元の農協支店長、役場建設水道課長や農業後継者、老人クラブの方に参加していただいて15名で組織している。

今年度学校支援委員会を5月、9月、1月に開催し、かんきつ栽培の体験実習場所と指導

者の確保や作業内容及び奉仕活動の場所について検討した。

4 教育課程上の位置付け

表中の 型は就職類型クラス、 型は進学類型クラスである。また 型の教科とは、学校設定教科（総合）である。

学年等	体験活動の種類・内容	教育課程上の位置付け
全学年	社会奉仕にかかわる体験活動 国道の環境美化・緑地帯の美化、河川の清掃	特別活動
全学年	勤労生産体験活動 摘果作業・袋かけ作業・収穫作業	型は教科 型は特別活動

5 活動の概要

(1) 勤労生産にかかわる体験活動

かんきつ栽培における体験活動

かんきつ栽培農家の生徒も多いが、あまり家の手伝いをしておらず、農作業を敬遠する傾向がある。そこで、ふるさとの誇りであるかんきつ栽培のよさや素晴らしさを知り、より地域に関心をもたせるとともに、働くことの大切さを学ばせる。

ア 摘果、除草作業

7月に、全校生徒161名で、持ち主の方の高齢化のため休園となっているかんきつ園の除草と摘果作業を行った。夏ということもあり蛇等に対する対策から上下ジャージに長靴での作業となった。休園であったため草が生い茂り、荒れ放題となっていたので大変な重労働であったが、生徒は真剣に作業を行い、園の整備がきちんとできた。

イ 袋かけ作業

12月に、1・3年生で一般の農家の園に出かけ清見タンゴールの袋かけを行った。今年は、果実の色つきが早く、多くの農家は11月中にこの作業を終えていたため、1・3年生のみで行い、2年生はかんきつ園での除草作業を中心とした園の整備を行った。

生徒は農業後継者や農家の方々の指導を受けながら作業を行い、交流もさかんに行われた。商品に傷を付けてはいけないと、軍手をつけて緊張感をもって慎重に作業を行った。農家の方によると袋かけは手間のかかる作業であり、多くの人手を必要とするということで、高齢者の方からは、涙を流してお礼を言われ、生徒も役に立ったことを実感していた。体力的にきつい作業であったが、それだけに仕事の厳しさや難しさ、また農家の方々の苦労も分かった。



ウ 収穫作業

3年生は2月、1・2年生は3月に農家に出向き収穫作業を予定している。1月に支援委員会を開き、受け入れ農家や指導者確保について協議し、実施に向けて準備に万全を期している。

エ 今後の取組について

高校から地域へもっと積極的に働きかけ、地域にとってなくてはならない学校に、地域から頼られる学校にするとともに、より地域に密着した体験活動にしていきたい。特に、今後、農家の高齢化が進むことが予想されるため、そのような方の力になりたい。

また、生徒への意識付けを強化し、ただ実施しただけで終わらせないで、地場産業、地域、労働についての理解を一層深めさせ、ふるさと・地域に誇りをもたせたい。今回の活動を通して、その意義や必要性を確信したので、地域にとってなくてはならない高校にするため、各方面との連携をより密なものにし、この活動を継続、発展させていきたい。

国道の環境美化

ア 国道の清掃

佐田岬半島を貫く国道197号は、地元と八幡浜市などを結ぶ重要な道路として利用されている。また、通称メロディーラインと呼ばれるこの道路は、瀬戸内海、宇和海の美しい景色を楽しむことから、九州への玄関口である三崎町を訪れる観光客にも親しまれている。しかし、利用者が増えたことに伴い、道路脇には空き缶や紙くずなどのゴミが目立つようになってきた。

そこで、ふるさとの重要な道路と美しい景観を守るため、全校生徒で5月に三崎町から保内町までの34kmの道路の清掃作業を行った。3～5kmの区間を生徒7・8人が担当し、学校に近い場所には徒歩で、遠い場所にはバスで移動した。ゴミは予想以上に多く、軽トラック5台分にもなった。清掃後の道路は見違えるように美しくなり、このことは地元新聞でも紹介された。

生徒の中には、「こんなにじっくりとメロディーラインを通ったのは初めてでした。海の景色はきれいなのに、道路にこんなにゴミが多いとは驚きました。作業中運転マナーの悪さに腹の立つこともありました。」と感想を述べるなど、地域への関心と環境問題への意識が高まった。



イ 国道緑地帯の美化

5月に、学校近くにある国道緑地帯の除草作業を行った。4か所ある緑地帯を、各学年と教職員が1か所ずつ担当した。7月には除草作業をし、花（ポチュラカ）を植え、猛暑の7月から10月末までポチュラカは可憐な花を見せた。

さらに手入れをし、菜の花の種をまいた。春には新入生が、桜と菜の花に祝福されて入学してくるだろう。「きれいな花を見ながら登校できる日が楽しみ。」という生徒もおり、豊かな心の醸成にも一役買いそうである。

河川の清掃

大川は町内唯一の河川である。この河川沿いの道路は、児童・生徒の通学路にも

なっている。ガードレールもなく初夏から草が生い茂り、夜間には道を踏み外しそうになる。7月に、環境美化だけでなく安全面からも河川の清掃を行った。作業は大変であったが生徒は意欲的に取り組み、3トラックで何度も往復して刈った草を運んだ。

今後の取組について

2月に開かれた推進地域連絡協議会において、来年度の活動について話し合った。その中で小中高が連携し合同で活動するものとして、県道・国道の環境美化を決定した。清掃範囲を広げ、佐田岬半島の先端から八幡浜市までの50キロ近い範囲を予定している。この活動においては、高校生が中心となって班分けや作業手順について話し合いをもって、小学生や中学生と協力して作業を行い、地域が一体となった取組にしたい。

6 活動の評価方法

それぞれの活動後にアンケートや感想文を書かせ、活動の目的をふまえて作業ができたか、どのようなことに気付いたか、気持ちに変化があったかなど生徒自身による自己評価を行うとともに、地域の方からも意見感想をいただき、それをもとに今後の活動をよりよいものにしようと、外部からの評価も行った。また、1年間のまとめとして発表会を行うことで今年度の反省をし、来年度に向けての抱負や心構えなどを新たにした。

7 活動の成果

昨年度までの活動は、短時間での実施であったため、生徒の心に残るものが少なく、態度の変容や地域理解・地域貢献には結びつきにくかった。しかし、今年度は、年間を通して系統的に計画を立て、目的を明確にし、継続して活動を行った結果、生徒の地域への関心は高まった。

生徒の活動後のアンケートを読んでも、これからは家での農業・漁業の手伝いをしたいとか、よいかんきつが出来てほしいといった労働の大切さや喜びを感じる生徒が多かった。また、清掃活動によって、何気なく見ていた道路に多くのゴミが落ちていたことが分かり、環境に対する意識や地域を大切にしたい気持ちが高まったと自己評価をしている。

地域の方からの評価としては、かんきつ栽培に関して協力してくださった農家の方から大変感謝された。そのことに生徒も喜んでおり、なによりも自分たちの力が必要とされていることが分かったことが、生徒の大きな“収穫”であったと思う。

8 今後の課題

- (1) 生徒は体験活動を重ねる中で、服装や態度がよくなり、次第に意欲的に取り組めるようになったが、地域理解や地域貢献という点においては、まだまだ不十分である。
- (2) 今年度は教師主導で計画・実施をしてきた。来年度は、学校支援委員会との連携を密にし、生徒も企画段階から参加させ、事業の有効かつスムーズな推進を図りたい。
- (3) この体験活動を本校の教育計画の中に位置付け、地場産業であるかんきつ栽培の振興に、より貢献できるものへと発展させ、地域社会の重要な構成員としての自覚を育てたい。